

第I部 『源氏物語』という「物語」

## 第一章 光源氏の「日記」考

### はじめに

『源氏物語』絵合巻、光源氏は自身が後見する齋宮女御に献上するために、「古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども」（三七七頁）を開き、紫の上とともにそれらの絵の選別をする。その際に初めて明らかにされるのが、光源氏その人の手になる日記の存在であった。

かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて、このついでにぞ女君にも見せたてまつりたまひける。心深く知らで今見む人だに、すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。

（絵合 三七七頁）

それは「かの旅の御日記」と称され、あたかも既にその存在が周知されているもののような書きぶりがなされるのだが、しかし、これ以前の物語世界に、光源氏が日記を書いていたという記述は、ない。

と、あえて白々しく述べてみたが、「かの」が指し示しているのが、次に挙げる明石巻の一節であるという通説に異論があるわけではない。

絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りごと聞くべきさまにしなしたまへり。見む人の心に

しみぬべき物のさまなり。

(明石 二六一頁)

ここには、光源氏が「絵」を描き、そこに「思ふことどもを書きつけ」ていたことが語られている。そして、これにつづく箇所にも、『源氏物語』における「日記」ということばの初出例が見られる。

いかでか空に通ふ御心ならむ、二条の君(「紫の上」)も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふをりをり、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがてわが御ありさま、日記のやうに書きたまへり。(明石 二六一頁)

紫の上が「日記のやう」なものを書いていたというこのくだりは、遠く離れていても通じ合う光源氏との行動の一致を述べているのだから、「思ふことどもを書きつけ」という光源氏の書き物もまた、「日記のやう」のものであったと解すことは可能であろう。それが、絵合巻において、「旅の御日記」という名称で改めて取り上げられたのだと見ることは、両者が別のものであるとするよりも、はるかに妥当性のある見解である。さらに、両者を連続するものと見るがために生じるいくつかの矛盾点についても、既に、先学諸氏によって詳細な検討がなされており、今さら論じなければならぬ大きな問題は残されていないように思われる。

ただ、今、あえてこの箇所を取り上げ、「日記」という呼び方にこだわったのは、物語の主人公が日記を書く、そのことの意味を、もう一度問うてみたいからである。

なるほど、物語内における日記の先蹤は、『うつほ物語』蔵開巻に語られる俊蔭とその両親の「家の記、集のやうなるもの」(四三七頁)に求められようし、後代の『袿衣物語』には、飛鳥井女君の手になる絵日記も登場する<sup>(2)</sup>。物語史におけるその存在は特別に珍しいものというわけではないのだが、しかし、既に指摘されている通り、「光源氏のものだけが書き手の生存中に公開されている」<sup>(3)</sup>という事実を、どのように位置づければよいのであろうか。

それは、絵合という前代未聞の行事において、光源氏方を勝利に導くという重要な機能をもつものであることはた

しかである。ただ、なぜ、単なる「絵」ではなく、「日記」という形でなければならなかったのか。そこに、光源氏の栄華に寄与するためだけではない、この日記の根源的な存在意義が隠されているように思われる。

本章では、先行研究が問題としてきた箇所を、本文を改めて検討することによって捉え直していくこととしたい。「物語」が内包する「日記」とは、いったい何を表しているのであらうか。その意味を考えることは、『源氏物語』が「物語」であることの意味をも自ずから照らし出すことに繋がるのではないかと考える。

## 一 日記の役割

冒頭に挙げた絵合巻の「旅の御日記」開陳のくだりは、つづけて、それを見た紫の上の反応を次のように語る。

まいて忘れがたく、その世の夢を思しますをりなき御心どもには、とり返し悲しう思し出でらる。今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞こえたまひける。

「ひとりゐて嘆きしよりは海人のすむかたをかくてぞ見るべかりける

おほつかなさは、慰みなましものを」とのたまふ。いとあはれと思して、

うきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か (絵合 三七八頁)

紫の上は、光源氏がこの日記を「今まで見せたまはざりける」ことを「恨」んでいる。実際、明石巻で光源氏が書いていた「日記」の原型とも呼ぶべきものは、紫の上への思いと密接に繋がるものとして登場していたはずであった。

あはれとは月日にそへて思しませど、やむことなき方(「紫の上」)のおぼつかなくて年月を過ぐしたまふが、ただならずうち思ひおこせたまふらむが、いと心苦しければ、独り臥しがちにて過ぐしたまふ。絵をさまざまに描

き集めて、思ふことを書きつけ、……

(明石 二六一頁)

明石の君と結ばれ、愛おしい気持ちが増しながらも、紫の上が一人です不安定な日々を送っていることを思うと、足繁く明石の君のもとへ向かうのも憚られる。独り寝がつづくそのつれづれを慰めるように、「日記」的なもの存在は語られ始めたのであった。

しかし、光源氏は、帰京後、紫の上にそれを見せていなかったという。紫の上の「返りごと聞くべきさまに」仕立てられていたはずのそれが、なぜ、まったく隠されたままとなっていたのか。この点こそが、古注釈が、明石巻の「絵」は「絵合に出たる絵にてはなき也」(『細流抄』明石)と解す最大の根拠であった。

伊井春樹氏が、「光源氏は帰京後絵日記の改作をしたり、ましてや二種類描いていたわけでもない。当初の絵日記に付与していた性格を滲標巻以降は全面的に改め、新たな展開の中で用いるように質的な変化をもたらしたにすぎない」と述べるように<sup>(4)</sup>、現在では、これを構想上の変化として捉えることが一般的であり、そのこと自体に異論はない。ただ、改めて、先に挙げた紫の上の「恨み」を読み直してみると、些細なことながら、その「恨み」の内容が、はたして従前の理解で十分であったのかという疑問が生じてくる。

『源氏小鏡』に、「この絵をば、我が御物から、あまりに秘して、都へ持ちてのぼらせ給ひても、紫の上にだにも見せてまつらせたまはざりし」ことが「紫の上の恨みといふ事の一つ」(京都大学本(第一系統・第一類))となったと述べられるように、従来、ここで紫の上が恨んでいるのは、光源氏が帰京してからもその日記を見せてくれなかったことだと捉えられてきた。しかし、その和歌にいう「ひとりゐて嘆きし」とは、紫の上が一人で都で嘆いていた頃、つまり、光源氏が須磨・明石にいた間を指すことは動かないはずである。紫の上は、その頃にこの日記を見ることができていたら、「おぼつかなさば、慰みなましものを」と述べていたのであって、たとえ、帰京後すぐに日記を見

ていたとしても、その恨み言は変わらなかったに違いない。

いずれにせよ、「今まで見せたまはざりける」という状況には変わりがないのだから、些末な点には違いないのだが、あえてこの点に拘りたいのは、ここに、「日記」というものの一つの性質が表されているように思われるからである。

先に触れた通り、『うつほ物語』しかり、『狭衣物語』しかり、『源氏物語』以外の物語において「日記」の存在が語られるとき、それは、故人の手になるものとして出現する。既に書き手がこの世に存在しないとすれば、書き手以外の登場人物が必ず知り知らぬ過去は、口頭以外の方法で伝えられるしかない。その一つの伝達方法として「日記」という書き物は存在しているのである。言い換えるならば、それは、時間や距離を隔てた登場人物間の情報共有の手段としてある。<sup>(5)</sup>文字として遺されたことによって、仲忠は亡くなった祖父・曾祖母の、狭衣帝は行方知れずだった恋人の、苦難の人生とその悲しみを知ることができたのであった。

光源氏の日記もまた、少なくとも明石巻時点では、これらと等しいものとして考えなければならなかったのではなかいか。それは、この先、紫の上と生きて再び会えるかどうかかわからない状況下で書かれたものなのである。語弊を恐れずに言えば、〈遺書〉のような心持ちで書かれたに違いないそれは、紫の上が恨んだ通り、二人が離れている間に見てこそ、その距離を埋めるものとして十分に機能していたはずであった。しかし、結果として、二人は無事に再会できたのであって、そののちとなつては不要なのである。二人には、直接語り合うという手段が既に確保されているのであり、今またその日記を取り出すことは、「とり返し悲し」い気持ちになりこそすれ、決して「慰み」にはならないのだから。

このように考えると、物語上、二度と触れられることのない紫の上の「日記のやう」なもののほうが、よっぽど自